

インド

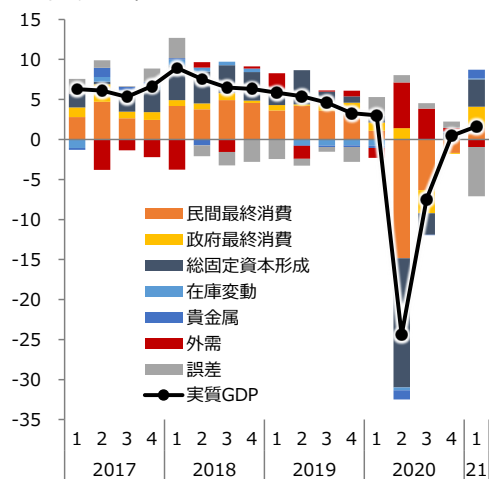
GDP (2021年1-3月)

2四半期連続の前年比プラス成長も、4-6月は再び悪化へ

政策・経済センター
橋本 拓摩
03-6858-2717

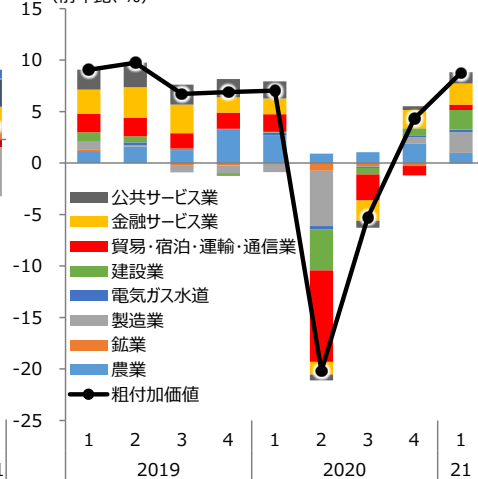
1 実質GDP成長率

(前年比、%)



2 産業別の粗付加価値

(前年比、%)



評価ポイント

今回の結果

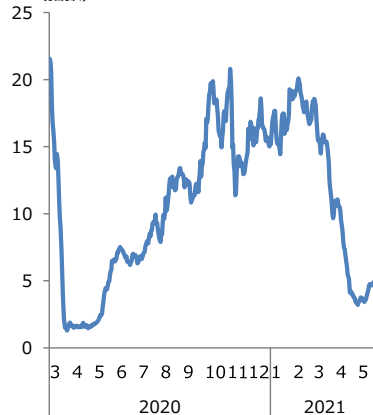
- 21年1-3月期の実質GDP成長率は前年比+1.6%と2四半期連続のプラス成長となった(図表1)。この結果、20年度(20年4月~21年3月)の成長率は同▲7.3%となり、51年の年次統計開始以降4回目のマイナス成長となった。
- 需要項目別では、1-3月期の総固定資本形成が前年比+10.9%と2四半期連続のプラスとなり、民間最終消費も同+2.7%とプラスに転じた。輸出は同+8.8%と7四半期ぶりにプラスとなるも、輸入の伸びが輸出を上回った。
- 産業別の粗付加価値では鉱業以外のすべての業種で前年比プラスとなった(図表2)。特に、金融サービス業と製造業がけん引した。

基調判断と今後の流れ

- 21年1-3月、企業活動を中心に経済正常化に向かっていったことが示された。しかし4月以降、変異株による感染再拡大から景気悪化は不可避な状況にある。
- 5月上旬に1日40万人以上の新規感染者数を記録、4月下旬から5月にかけて、デリー首都圏やマハラシュトラ州などほぼ全域で再びロックダウンが導入された。5月末の新規感染者数は20万人前後まで減少するも、警戒は続いている。
- 日次データの交通混雑度指数をみると、感染が再拡大しロックダウン措置が採られた4月から大きく低下していることが分かる(図表3)。外出行動が抑制されていることから、消費活動のほか企業の生産活動にも大きく影響が生じている。
- こうした感染再拡大を背景に4月にはインドルピー相場に下押し圧力がかかるも、5月は落ち着きを取り戻している(図表4)。しかし今後、景気回復力を強める米国で量的金融緩和策の縮小等の議論が始まれば、再びルピーに下押し圧力が高まろう。輸入物価の上昇をもたらすルピー安には引き続き注意を要する。
- 21年度は感染再拡大と外出制限を受けて個人消費が4-6月期に再び停滞し、景気回復の重しとなるだろう。しかし、前年度の経済低迷の反動増に世界経済の回復を受けた製造業の持ち直し等が期待され、10%程度の成長を予測する。

3 交通混雑度指数

(指数)



4 為替動向

(INR/USD)

